飯綱町
集落創生新聞

おらほ ORAHO

創刊号
2023年春
編集・発行
飯綱町企画課
地域おこし協力隊
☎026-253-2512

集落創生事業とは？

集落の「今」「将来」を考える

飯綱町が進める「集落創生事業」とは、そもそも何なのか―。

全国で少子高齢化、人口減少が進み、自治体の維持・存続自体が危ぶまれる状況が見え隠れする昨今。各地では、何とかその進行に歯止めをかけようとさまざまな取り組みがなされている。

そんななか飯綱町では、町を支える土台である集落の「機能維持」と「活性化」が喫緊の課題であるという考えのもと、2016年にこの「集落創生事業」をスタートさせた。

具体的には、各集落の住民に、集落の課題を洗い出し、希望する将来の姿について考え、話し合ってもらい、同時に、その将来像の実現に向けて実際に動いてもらおうというもの。現在、この町からの呼びかけに対して、自主的に手を挙げた町内16の区または組がそれぞれにプロジェクトを打ち出し、取り組んでいる（2023年3月時点）。

町は、そうした取り組みを支援する目的で、おおむね5年を目安に上限300万円を交付。その前段階として計画を策定することに対しても上限5万円を交付している。担当の企画課地域振興係は、「ぜひ、この『集落創生事業』に自主的・主体的に取り組んでいただき、町の維持・発展に向けて一緒に前進できたら」と話している。

中宿

コミュニティの活性化促進

各種イベントで多世代交流

中宿地区は、2017年から6年間にわたって、「未来☆宿40」と題し、集落創生事業に取り組んだ。

中宿地区では、「中宿区民同士が余暇を共有し、区内コミュニティの活性化を図る」「子ども達が郷土愛を感じられるような風土づくり」「区民自身が中宿のいいところを再発見できる」という3つの目標を設定。その上で、もともと地域で管理・利用していた「中宿倉庫」を整備し、地域コミュニティの拠点や※フットパス・ステーションとして活用しようとさまざまなイベントを企画した。

「田休みコンサート」や「なかじゅく文化祭」をはじめ、フリーマーケット、ハロウィーン、イルミネーション、「0円企画」と銘打って行った秋葉神社の桜のライトアップ、ほたる会、お月見会など大小さまざまに実施したイベントは、地区内の子どもから高齢者まで多世代が交流する機会となり、文字通り、地域コミュニティの活性化を促進しただけでなく、地区外の人を呼ぶきっかけにもなったようだ。ただ一方で、すべての年代の住民が満足するイベントを開催することの難しさも感じたそう。

また、21年には、中宿倉庫のシャッターを子どもたちでペイントするイベントを実施。子どもたちの郷土愛を育むことにつなげた。

コロナ禍中も、屋内に集まることなくできるイベントを行うなど工夫を凝らしながら地域コミュニティの活性化の継続に力を注ぎ、成果を上げた中宿地区。事業終了後もイルミネーションなど、地区内で好評だったイベントを継続できないか検討している。

※フットパス＝森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと（Foot）ができる小径（こみち：Path）のこと。イギリスが発祥

「女性のみなさん、出番です！」

地域おこし協力隊　三原彩音

飯綱町は、昨年4月に作成した集落創生事業に関する資料のなかの事業実施に伴う留意点で、「集落の将来計画等の策定にあたっては、当該区・組の多種多様な世代（老若男女）の意見を反映することを必須とします（区・組の役員だけで検討するのではなく、若者や女性の意見を反映した計画とするため、若者と女性が過半数を占める検討組織等を組織して、多様な意見を反映した計画としてください）」としています。これはズバリ、これまでなかなか集落のなかで表立って動く機会が少なかった若者や女性の声、思いを集落の「機能維持」や「活性化」に生かそうということだと私は捉えています。この集落創生事業の推進を任務とする地域おこし協力隊の私も、協力隊としてだけでなく、飯綱町に住む一人の女性として集落の「今」と「将来」をみなさんと一緒に考えたいと思っています。

「日本一女性が住みたくなる町」をめざしている峯村勝盛町長も「女性のみなさんの力を貸してください。一緒に地域の発展をめざしていきましょう」と呼びかけていますので、少しでも「やってみたいな、やってみようかな」と思われた女性のみなさん、ぜひお気軽にご相談ください。

集落創生事業実施までのおおまかな流れ

❶事業の中心となる住民グループ（委員会）を結成
❷集落の課題を総ざらいする

課題

- 高齢化 ・少子化 ・人口減少
- 高齢者のみの世帯増加
- 耕作放棄地増加 ・空き家増加
- ゴミ出しや電球の交換、買い物、雪かき、草刈り等に困る高齢者世帯がある、増えてきた
- 子どもが安全に自由に遊べる場所がない
- コロナ禍を機に住民同士の交流減少
- 移住者と交流できていない
- 若者が集落から出て行ってしまう、帰ってこない

❸集落の将来を考える

希望

- 若者や子どもがたくさんいる集落に
- 耕作放棄地や空き家を有効活用して住民にとって有益な形に
- 住民同士が気兼ねなく助け合える集落に
- 集落内の施設や公園をきれいにして守っていきたい
- 集落に対して子どもや若者が愛着や誇りを持てるように
- 若者が帰ってきたいと思える集落に

❹事業計画をつくる
❺事業を実施する

計画

- 助け合いの仕組み設立
- 集落内の草刈りを住民で実施
- 集会施設を住民の意見を踏まえて改修→イベント開催
- 子どもから高齢者まで多世代が楽しめるイベント開催
- 集落内の伝統や歴史的文化財について知り、守り、引き継ぐ取り組みを実施

横手

集落を「野菊のさと」に

「方言カルタ」の制作にも挑戦

2017年から4年間、「野菊のさと田園構想実施プロジェクト」と銘打ち、取り組んだ横手地区。町内随一の景観を誇ることから、映画「野菊の如き君なりき」（1955年公開）のロケ地となった歴史を踏まえ、集落を「野菊のさと」にしようと、そば処「よこ亭」の向かいの土手などに野路菊を植栽。当時、プロジェクトの代表を務めていた寺島政次さんは、「ずっと住んでいると景観の良さも暮らしの中に溶け込んで、当たり前のことになる。景観の良さを改めて認識する良い機会になったと思う」と話す。

また、19年には、地元で使われている言葉を題材にした「よこて方言カルタ」を制作。旧牟礼村公民館で「方言集」が作られたり、旧牟礼西小学校の児童が地域を題材にしたカルタを手掛けたりといった前例のおかげもあり、地元の言葉を集めて残し、後世に伝える機会として「方言カルタ」を制作するアイデアが住民のなかから生まれた。

制作は、普段使っている方言を五十音分集めて取捨選択することからスタート。おばあちゃんたちがしゃべっていた言葉を思い出したり、実際に話を聞いてみたりしながら、読み札の制作を進めた。絵札の制作は3つの高校の生徒に協力してもらった。寺島さんは、「細かなイントネーションやその言葉の雰囲気を活字で表すのは本当に難しかった」と振り返る。

加えて当時、イノシシやクマによる農作物被害が顕著になっていた横手地区では、有害鳥獣対策にも注力。プロジェクトを機に「わな猟免許」を取得した住民もいるそうだ。

現在、横手地区では、野路菊の植栽が地元の有志により続けられており、秋には可憐な花が顔を見せ、壮大な景色の足元に彩りを添えている。

普光寺中部

住民のアイデア光る

地酒開発やドローン活用

普光寺中部地区では、地元の祭りの担い手が中心となって、住民グループを組織。2017年に計画を策定し、「のどかな農村の風景を守り、すべての住民が笑顔で暮らせる地域づくり」を目標に、取り組んでいる。

なかでも特徴的な取り組みは、19年から21年にかけて行った地酒の開発。当初は、地区内の休耕地を有効活用する手立てとして、集落で酒米を栽培して地酒にするアイデアが検討されたが、酒米の栽培には高度な技術が求められることがわかった。そこで、地区内の農家が生産した食用米（コシヒカリ）を使用して地酒をつくることに方針を転換して実施した。

地酒は、その名も「普光寺乃中（ちゅん）」。県内でも有名な「佐久乃花」の語呂にあやかって名付けた。ラベルは、地区内に住むデザイナーに依頼して作成。地区内で全戸配布し、好評を博した。

また、集落の昔と今の姿を後世に残そうと、地区内で集落の様子がわかる写真を集め、写真集にすべく企画。この話し合いを進めるなかで、「ドローンを使って地区内を撮影するのも面白いのでは？」というアイデアから発展して、集落創生事業のプロジェクトの一つとしてドローンを購入し、地区内の課題解決への活用も進めている。21年には、ドローンの維持・管理を行う目的で普光寺中部組の下部組織として任意団体「北信無人航空機プロジェクト（HUP）」を発足した。これまでに、普光寺用水の法面崩落現場の空撮を行い、映像を改修工事に伴う地元向け説明会の場で活用したり、録音したトビの鳴き声をドローンを使って地区内の圃場上空で流すことで鳥獣被害対策につなげる実験を試みたりと、集落におけるドローンの活用方法を模索している。同団体は「今後も普光寺中部組にとって有益な活動を続けていきたい」と話している。

まちづくり活動支援事業との違い

必要に応じて使い分けを

飯綱町には、集落創生事業と同じように町民が取り組む自主的かつ公益的な活動に対して町が資金面の支援をする「まちづくり活動支援事業」がある。ここでは、この2つの事業の違いを紹介する。

まず支援の対象について、集落創生事業では、牟礼地区23区と三水地区27組のあわせて50集落に限られるが、まちづくり活動支援事業では、町内の区や組だけでなく、分館や小中学校のPTA、町内に在住、在学、在勤の人5人以上で構成され、町内に活動拠点を有する団体も対象となる。一方、支援が受けられる活動内容については、どちらも地域の課題解決や活性化のために、▽新しい仕組みの策定▽イベントの開催▽自然や伝統文化など既存の資源の保護、ブラッシュアップ―など、地域づくりに関するさまざまな活動が対象となるが、まちづくり活動支援事業では、重点テーマが設けられている。2023年度（既に募集は終了）は「町内の景観を良くする事業」と「2050年カーボンニュートラルにつながる事業」で、このどちらかのテーマに該当する活動だと判断されると、補助率がかさ上げされる。

どちらも細かなルールや申請方法が定められているため、町のホームページや企画課での確認は必要となるが、「自分たちが暮らしている飯綱町や集落を良くしたい、元気にしたい、将来にしっかり引き継ぎたい」という思いを実現する制度に変わりはない。そして、そうした思いを実現させる一歩としてこうした制度を利用し、ゆくゆくは、資金面も含めて自立した形で持続できるように取り組むことが期待されている。

補助金について

集落創生事業

事業区分	補助限度額
計画策定	50,000円／1団体
事業実施	3,000,000円／1団体（5年目安）

まちづくり活動支援事業　※補助金の交付は1つの事業につき原則として3回まで

事業区分	通常		重点テーマに該当	
	補助率	補助限度額	補助率	補助限度額
補助対象経費が50,000円未満の事業	100%以内	40,000円	100%以内	120,000円
補助対象経費が50,000円以上200,000円未満の事業	80%以内	100,000円		
補助対象経費が200,000円以上1,000,000円未満の事業	50%以内	200,000円	60%以内	240,000円
補助対象経費が1,000,000円以上の事業	20%以内	500,000円	24%以内	600,000円

飯綱町集落創生新聞「ORAHO」って？

2016年にスタートした「集落創生事業」の町内各地の事例紹介や事業の周知を目的に創刊しました。ぜひ、各地の事例を参考にしていただき、それぞれの集落で事業に取り組むきっかけになれば幸いです。

新聞のタイトル「ORAHO」は「私の」「私たちの」という意味の方言「おらほ」から名付けました。この新聞が、集落や町のことをみんなが「自分事」として捉え、集落や町のためにできる範囲で動くきっかけになることを願います。

よくあるQ&A

▶担当の橋詰さん（企画課地域振興係）に聞きました

Q1　自分ところの区や組だけでは人手が足りない。他の区や組と一緒に取り組むのはあり？

A1. ありです。複数の区または組が、共同で計画策定や事業実施する形もOKです

Q2　やってみたい！と思っているけど、まずは何からしたら良い？

A2. 区長または組長さんに相談しながら、同じ区または組の中で同じ思いを持つ人や共感してくれる人を集めて、住民グループ（委員会）をつくりましょう
老若男女問わず、さまざまな立場の住民の方がかかわる形をめざしましょう

Q3　集会施設の改修や区または組の備品の購入に使いたい！

A3. ソフト事業を伴わない単なる集会施設の改修や備品の購入のためだけに交付金を使用するのはNGです
ちなみに…集会施設の改修については別途、企画課に相談を。条件次第で別の補助制度が利用できます